

フとは
つながり、
をさらに楽し
な活動を行っ
して飛騨市を

飛騨市
ファンクラブ
HIDACITY FANCLUB

飛騨市ファンクラブと関係人口

= 飛騨市 都竹 淳也市長 講演会 =

人口減少社会の中で、キーワードとしてあげられる「関係人口」。この関係人口を「飛騨市ファンクラブ」といった具体的な形で生み出し、全国的に注目を集めている飛騨市の都竹淳也市長の講演会が5月8日(金)、シェルターなんようホールで開かれました。講演会の主な内容をご紹介します。

◆総務課 (☎40-3211内線411)



心を寄せてくださる方と連絡をとれる関係を具体化

人口減少の中で何が大切かと考えた際、いかに市以外の地域や町と交流し、つながるか。これが人口減少時代の大きな戦略であると考えます。一つのポイントは「地域外の人たちとの交流」です。全国からいらっしゃった観光客の皆さんとは、連絡を取る手段がありません。ここが問題だと思ったのです。飛騨市に心を寄せてくださった方を見える化し、連絡が取れる仕組みを作って、関係を築くことが大事ではないかと考えました。それを具体化したのが「飛騨市ファンクラブ」です。

2017年1月にスタートし、最初の2ヶ月は会員がわずか30人ほどでしたが、SNSでの投稿を機に会員が増え始め、8月末には1,000人を突破しました。話題になるとメディアも動き、一つ紹介されるとまた増える。用意した2,000枚の会員証が底をつき、すぐに発送できない状況になり、担当者が「謝罪会見風動画」を作成すると、これがまたバズり、一気に増える軌道に乗りました。

さらに、ふるさと納税をされた方からの流入も仕組み化し、毎年1,000人ほど会員が増えています。現在の会員数は5月1日時点で1万8,514人です。本市の人口が2万1,000人ですから、まもなく人口を超えます。

会員同士の交流を最重視

ファンクラブでは、プラスチックカードの会員証を発行しています。それから名刺も20枚発行します。この会員証を持って市を訪れると、さまざまな特典が受けられるほか、名刺をもらった人が特典を受けられる「紹介状」のような仕組みもあります。500円の宿泊特典や、まちの中で使える1,500円分のおもてなしクーポンももらえます。このカードは、電子地域通貨「さるぼぼコイン」とも連携しています。

2017年度から東京、名古屋、大阪などでファンの集いを開催しています。飛騨市の地酒や料理を楽しめる場です。最初に東京で行った交流会は大失敗となりました。参加者同士やスタッフとの交流が十分にできなかったことが原因です。そこから、会員同士の交流を最重視するようになり、交流を促す仕掛けを設けるようになりました。



現在は「お出かけファンクラブ」という企画も進めています。「飲み会」の場を用意してもらい、飛騨市を応援して下さるなら、市長が酒を持って全国どこへでも行く、というものです。また、

会員数が増えてきたため、個人の興味に合わせた「部活動」も始めました。

関係人口は「移住したくない人」が圧倒的に多い

こんなことをしていたら、頼んでもいないのに手伝いに来てくださる方が現れました。お話を聴くと「何でも言ってください。いつでも来ます」とおっしゃるのです。こういう方々を「関係人口」と呼ぶのだと気がつきました。政府も大きな力を入れている「観光客以上、移住者未満」の関係人口です。

この人たちの特徴について、企業や大学と共同研究を行いました。その結果、関係人口は「移住したくない人」が圧倒的に多いということが分かりました。これは非常に重要な点で、関係人口は移住しません。関係人口施策と移住施策は別のものであります。また、地域への愛着が高まる要因として「地域に友人・知人がいる」「印象深い経験がある」があげられます。つまり、交流があって、知人が増え、自分が行ったことが感謝される。そういう自己有用感を得られることが、極めて重要だということです。そして、これらを踏まえ、関係案内所「ヒダスケ！」というプログラムを作りました。



人口減少や高齢化は進んでも「人“交”密度」を高めていく

ヒダスケ!は、簡単に言うと、飛騨市が手伝ってほしい困りごとをリスト化して、そこに申し込んでもらってマッチングするという仕組みです。謝礼は「さるぼぼコイン」500ポイントのみで、交通費も出ませんが、収穫したトマトを持ち帰るといった、体験としての報酬があります。

コーディネーターが中心となり、地域の集会に参加して困りごとを発掘し、リストを作ります。2020年4月からのプログラムは544件、延べ参加者は6,300人を超えました。主催者からは「人手不足が解消された」「繋がりが持てた」という声があり、参加者からも「今後も関わりたい」という感想をいただいています。

お互い様の精神で助け合う場が生まれ、新しいことに挑戦する動きも感じられ、それが地域の魅力を維持する原動力になっています。人口減少や高齢化は進みますが、「人“交”密度」を高めていくことが大切です。そして全体のキーワードは「嬉しい、楽しい、面白い」。参加者がそう思えるプログラムを徹底的に追求することを基本に活動を広げています。